

# モザンビークで医療支援

## 田野病院薬剤師の斉藤さん

【中芸】3月中旬にアフリカ南部を襲ったサイクロンで被災したモザンビークに、日本の国際緊急援助隊医療チームの一員として県内の男性が派遣され、このほど帰高した。安芸郡田野町の田野病院の薬剤師、斉藤忠勇さん(38)は香南市。野外診療所での調剤や衛生管理を振り返り、「職種を超えて助け合う貴重な体験だった。日々の仕事に生かしていか」と話している。

(北原宣吉)

## 「職種超え貴重な経験」

援助隊の事務局を務める国際協力機構(JICA)によると、県内からの医療チーム参加は28年ぶり。

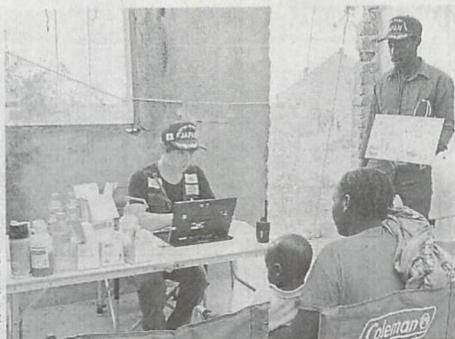
山口県出身の斉藤さんは、徳島大学薬学部1999年に在学中の1999年、台湾大地震で援助隊の活動を知った。自

分もいつか人の役に立ちたい」との思いで薬剤師としての経験を積み、3年前に隊員登録。今回、援助隊の第1陣27人の中に入り、3月28日から4月10日まで派遣された。

モザンビークではサイクロンで600人を超える死者が出た。医療チームは、被害が大きかった中部の港湾都市ベイラから車で2時間半ほどのグアラケアラ村に診療所を開設。村には近隣から多くの避難民が集まっており、被災による外傷のほか、マラリアやコレラなどに苦しむ患者に対応した。

業務の合間には、子どもたちに折り紙を披露したり、サッカーに興じたり。子どもたちは捕ったカメレオンを見せてくれるなど交流が生まれた。斉藤さんは「初めてのアフリカだったが、人の温かさを感じた」と振り返る。

JICAによると、現在、県内で医療チームに登録しているのは斉藤さんを含め5人。斉藤さんは今回の参加について「職場の理解があつてこそ。上司や同僚に感謝したい」とした上で、「国際緊急援助隊に興味を持つ人が増えるよう、自分の体験を伝えていきたい」と話している。



野外診療所で調剤する斉藤忠勇さん。不衛生な水への対処も助言した(斉藤さん提供)



国際緊急援助隊の医療チームの一員としてモザンビークに派遣された斉藤さん。「国際緊急援助隊に興味を持ってもらいたい」と話す

(田野町の田野病院)

住民は不衛生な井戸水で生活し、平時から下痢に苦しむことが多く、斉藤さんは水を煮沸して薬を飲むよう指導した。期間中はテ